北斎漫画　十編　全
365

# 生花早学十編序

花瓶し挿木に指をし此書ハしも既に撰集なせ
しハ好人なるや松屋抑く元園く為て細くざり
流るに燈ある南里亭其楽ゆ为るとを打つねそへ
天保六巳年でうりなる巳が未だうハよせんと師へく
日が釈友暁鐘成うしに二篇を續まし社ま
いまし世に行ハるる事ゝなるの稀びりて翅るゝ筆も
終に今十編に及べり此稀びに其小冊は斟ぐさ

図を源に一ッとしてそこじたるちりく故実の
事中に淑人乃まく見んて吉と近かんさる家
の秘事をとさく写させしが神学の世をとぶれ
其法はまことにゆるがかくもとをて引がかくそて
実にも華道の六藉三要とやいはまし わを
以みじくお師ぐゆまくつぎを添て此
端書とはなせり

十三軒糸麻呂

生花早満奈飛十編目録

花車之圖
烏丸光廣卿
御好にて
五間の大床に
挿させ給ふ
十寸穂薄
龍膽
梅もどき
女郎花
芳宜
以上五種
○轅
長四尺五寸
紐
真紅
惣黒塗蒔繪
銀金具
車之徑一尺六寸
花桶一尺三寸
口ひろく真塗也
右寸法ハ或諸侯方にて
飾らせ給ひしを写し所なり

# 花棚之圖

棚ノ長サ五尺六寸 幅一尺二寸三ア 板厚サ八ア
高サ三尺一寸二重棚ノ間一尺八寸棚ノ下一尺三寸
柱九歩角 簀ハ青竹ノ當座組七箇くもゝ同様之



花ハ低く生る方よしト云

○花車之挿方心得

○一書ニ云花車ハ烏丸光廣卿の御物好ニして五間の大床ニ秋の千草を色どりくさりやう挿させ給ひしを始とし夫より世ニ行はれ専ら用ゆる事となりあまり前ニ圖を出せり左右の寸法ハ或諸侯方ニて作らせのよを摸に所之春の花ハ殊更ニ雅しくしてよし花のすがた葉の形ちおもむく相似たるものハ用ゆべからず容かはりたる花を挿べし

○花棚の挿方

○桜ハ七花の傳といひ傳ふれども此棚の挿方ハ別の子細なし大書院の飾ニ繋しは是ハうつし豊公醍醐花見の時名けるさうをそろへて置籃に挿ありしのみしぞ籃ハ青竹の當座組ニして七しも同じ形なり花挿方ハ随分ひしれ方恰好よしとし寸法ハらるしく圖の傍ニ記せり

○錦生の傳

○凡挿花ハひとより繁く数多く入たるハ好ましからぬことなれども秋ハ千草の花麗しく咲乱き宛も錦をさらせるがごとく野外ニ色を争ふ時節なれバ秋草ニ限りて九種十一種或ハ十三種も取合せ大籠ニ生るなれを錦生といふ

類題萬葉集

木々ニ見し春の錦の枝よりも猶や廣野の草ほ花々

後柏原院御製

毎日百首
秋風のたゝまくおしく見ゆる哉庭の千草は花乃錦ハ　爲家

右二首の古歌によりて錦生の作意をあわせり然れバ木の花を混ることハ努々有べからず色の取合ハ白黄紅紫を除けてよし

○燕子花の傳

燕子花ハ参州八ツ橋を名所とす故に水草の中に過て是を愛す故人も燕子花を花の君と賞せり挿るに婥娟として強からず花の茎を隠して生べし陰葉陽葉舖葉添葉水切葉あくまでゆるべし水際清く潔く入べし生方の強きを嫌ふ紫白とり合せ[illegible]白[illegible]會釈しるべし



七百首
八橋のむかし此蹤のかきつばたと同じ心にちひ渡るらむ　爲家

載玉集
夏草の茂れ中にも燕子花折袖までも紫にそむる

又是を二株に分て生ることハ

かきつばた同じ沢辺に生ながら何をへだつる心あるらん　河内

是を證歌に取て作意せし之則ち燕子花を正花として萍蓬。江浦姫
蒲。角。木賊。水。万年青るどの水草を取合せ生るものもあり

是ハ類題萬葉集に

異花ハ白より澤に紫の一むらこもる燕子花かな

源仲正

此意によりて種々の花を取合せ生るもあり

○菊の傳

○菊ハ多類数名あり和漢ともにこれを賞して長生の仙花あるゆへ慶席寿筵に用ゆ

仙人のかざしにさすが万世も霜をもかれて匂ふ白ぎく

逍遥院御製

新拾遺集

幾かへり千歳の秋にあひぬらん色もかはらぬ白菊の花

大炊御門内大臣

類題萬葉集

如何なれバ老せぬ秋を重ねつゝ千世のかざしに白菊の花

太宰帥爲経

是等の古詠を見て白菊の賞を知るべし挿方夏菊ハ繁くして強く挿べし秋菊ハ優しく花香に挿べし多く生る時ハ裏菊又ハ隠の花などいるべし又菊の星生といふてあり是ハ

久方の雲井上にて見る菊ハ天津星とぞあやまたれける

此歌よりして白れ小菊を芒などに會釈して生るなり

永久四年百首　仲實

今日毎に菊を薬とする人ハ千歳の秋を過るなりけり

此意を以て菊ある時節にハ病床に必らず挿べきなり

○水仙の傳

水仙ハ六花四葉の本體なり最冬にハ霜雪の寒苦堪忍の結根を増し子孫絶ざるを祝して婚姻の席に用ゆ初冬を以て賞花とし中冬より盛の挿方なるべし春に到りてハ賞せず是によりて花を幽に挿べし大挿の時ハ中冬より霜枯の葉を一二葉會釈べし春になりてハ三五葉も有てよし但し婚礼の席に生る時ハ水仙臺を除くべし以上燕子花菊水仙あれを三草の傳といふ

○梅の傳

○梅ハ百花に魁し霜雪を凌ぎ君子の操あり清香彩色諸花に勝れて愛度ものにて和漢ともに尊く賞れども種類多しといへども一重の白梅を以て第一とす壽莚慶席にも生べし詩にいはく露暖南枝花始開又窓梅北面雪封寒といひ南枝北枝梅開落

已異しくなり是ホいづれも南陽をうけて先花咲より人あらるを述る故ヿ梅を生るハ花を多くつけて殊ヿよる但しれを心流しホわ陽の座ヿ用ひ小さく花のかくされ所を根〆留の陰の座ヿ遣ふべし是梅を生る第一の心得あり又夜陰の席ヿ白梅を生る事

堀川院百首　　顕仲

春の夜ハ月ヿまぐるる梅の花唯香ばかりぞ印なりける

家集　　慈鎮和尚

意なりて夜半ホ吹来る風あれや暗ハあやなれ梅の匂ひは

○紅葉の傳

紅葉と賞するもの種々あり楓鶏冠木蔦柞檀黄櫨櫻備栴衛矛ホあらうまつれども就中鶏冠木をもつて真の紅葉と賞し桜と花と称するが如く余の木ハいる何の紅葉といはされを通ぜし唯鶏冠木のミ紅葉と号ス

類題集　　政為

ひとつぞと見る心ヿ分る色ハなし枝の紅葉の濃も薄きも

故ヿ皆一面ホ紅ひあるハ返るく奥ゆくあし花ハ盛ヿ月ハ隈なきをとのミ見るものかハと兼好法師の言りんも実さるうくでし又夏の若鶏冠木ハ白菊をそへて生べし秋を断る意あり梅ハ木を賞する始め紅葉ハ木を賞する終なり故ヿあれを二木と称し

○縮柳條の傳

○柳ハ糸と言ふより長きためしを引て慶席に祝ひて挿るゝ又綰柳條といふハ旅行の出立を祝する故実にして唐人の詩に離別河邊綰柳條と作する意を取あり綰ハ還と音通ずるを以て旅行の人に柳を曲めて送る漢土の故事をおもひ和朝にも旅行を祝して是を生るなり又青柳の糸長く契を結ぶといふ心あるべし

○藤花の傳

○藤ハ殊に夜陰を以て賞翫れ是ハ黄昏より色を増て潔れ故あり挿方ハ幹のゆがみ枝横に振出さる松をつけ其ハ枝に纏せ生るを習ひとす松ハ葉寂しきを用ゆべし

松風に花の匂ひもうち出て
あすもえの藤れひうね夕ぞえ
後柏原院御製

送風鈴　古れ宝鐸を送に釣て用ゆ

昔大徳寺の玉舟和尚白藤を
松にまとはせ挿られしとぞ

夜深不語中庭立月照藤花影上階　白居易

是ホ皆夜藤を賞ずる所あり又纏るふしハ松ニ限るべし

○芭蕉七葉一花の傳

○芭蕉ハ凡そ三月の末より葉を生じ九月の末ふいたりて凋む稀ニ花咲ものハ五月の頃蕾出て七月迄ニ開く黄白の色ニ陰花成也慶席ニハ用ひず挿ふ床の廣狭をよくく小席ニハ生べからず芭蕉の廣太なるハ詮なし是ニ七葉一花ニ定むる習ひあり

○巻葉　若葉をいふ　○折葉　流を折るをいふ

○丸葉　全丸葉をいふ　○半葉　心より半裂る葉をいふ

○裂葉　細く横に裂るをいふ

○切葉　半より切るをいふ

○枯葉　老葉の枯るをいふ

○一蕚　心中より出る一茎ニ一花あり

右七葉一花の組方ハ口傳なりと雖も組方ハ其時の宜きに随ひ
臨機應變あるべし尤も五葉も挿べし必しも七葉にかぎらず挿ことも
いつれハあしく七葉の名目を擧るのみ

○蓮三世の傳

○三世とハ過去現世未来といふ是を蓮花にかたどりて挿るを三世の
傳といふ 流義によりてハ是を用ひざるも多し 先開たる花をもつて現世とし蓮臺を
過去とし小蕾を未来とし是を三瓶に分て生るを三世三瓶と云

○未来の挿方ハ床の陽の座に瓶を置き真の花形にて巻葉蕾を
いけ水ぎハに蕾を添べし ○現世の花ハ床の正中に瓶をおき行の
花形なるべし 立葉流葉水切葉水上葉開葉撞木葉巻葉
おなじく七ツ葉とも細かれ開花半開花を取まじへ随分賑やかに挿べし

○過去の花ハ床の陰の座に瓶をおき草の花形なるべし心を流して
主とする所ハ蓮臺を置べし又枯葉を交へ瓶中をすべて寂しく
半開の花を會釈あり

又三世一瓶に兼備して生る時ハ心ハ蓮臺にて生る又ハ破葉
かるひハ枯葉を生て通用の座に開たる花を置留に小蕾を用ゆ
置かへに立葉流葉浮葉開葉水切葉水上葉撞木葉ホ
此内を宜しく取合せて會釈べし

一説に桜（日本にて花の王と云）牡丹（唐土にて花の王と云）蓮（天竺にて花の王と云）故に此三種の傳を
以て三國花王の傳と称ることく

○松差合の傳

○松ハ緑を以て賞翫するもの故に緑ある花と會釈べからず
緑なきハ凡て花咲ある時若芽の出る類ハ則ち緑ありとてこれを
禁べし又庭に松植ありて床に松を生ることを差合とし是を忌
素松ハ千歳の齢を保ち祝ひ寿ぶて群木の長なりまた霜
雪を経て色を變ぜざれバ是を貞心に比べて貞木と称し故に幾
所ありとても苦しからず庭に何程ありとも差合の遠慮に及ず

○梅生合の傳

○白梅と紅梅と挿合にハいづれも名花なれども色の見切葉を用ひ
此故ハ白梅ハ諸木に勝れて賞翫の花なり是によりて見切葉に及ばず
またれども紅白二種なりとも用ひず是ハ梅花ハ葉なれ上に一色にても出
二種ちすで合せ生ることあれバ葉ある花を會釈と傳へ左も紅白乃
花の類ハ梅にさし合もく寒菊を用ゆべし挿方ハ白梅をもつて心と
極む凡て陰の口に生る時ハ白梅を心に紅梅を留とし寒きく成
流に用ゆ又陽の口に生るときハ白梅の心に紅梅の流し寒菊にて
留と心得べし

又梅を生る時白ひ有花を添べからず梅花ハ白ひと賞翫の第
一とれ故に同じ香ある花を添るハ梅花の香を損ふありとてこれに
よりて堅く禁ず

又庭に梅を植ある床に梅を生ること苦しからず猶以て賞翫く

此訳ハ梅花ハ香を第一に賞翫し匂ひハ何くより来るを好む嗅気
風に誘ハれ来るを伽羅を焚て穢をさそし庭に梅ある時ハ庭へ
吹来ル穢をも拂ひ床に挿置ときハ座鋪の不浄を拂ふがゆゑに
梅におゐてハ差合をいはず又庭にある梅の匂ひも床に生ある
梅の匂ひもいづれも同じ花香あれバ双方の匂ひ合して一入に
香甚しく賞翫多しとの事也是に掛物屏風の繪に同花に差
合を禁ざるものなり

○色見切葉の傳

○凡そ同じ花にて色の違ひあるものを挿るにハ見切葉とて何に
ても花の咲ざる大葉を隔てにつかふ是通例の見切葉なり又極

口傳より六瓣ハ仙翁花紅く百合花紅しあれを挿合れ類又ハ白き
花に白き花の類草ハ遠へども花の色同じれ類あれハ堅く挿ざる
事あり然れども客両人より花一種で来る同じ色の花ある時ハ
夫を生ざれバ不礼あり同色を生ることハ挿花にハ禁ずるところ之
何れを生べきを捨るよふにて成れ双方の客の志しを破られと
いふ両全の挿方ニ用ゆると見切葉よふ是所謂奥儀の秘事あり
此見切葉ハ花と花との間へ花咲ざる葉を挿て花ハ双方先よふく
行合ざるやうにいふ根本ハ一所より出し葉を中へ包ませるやうれ
生ること同色花の内にて位ある花を真とし位の次あるをそくに
生べし此いけ方ハ先真の花とのる次に見切葉をつけ余しそ。
位次ある花を葉より見おろし真の根本より生るく

○竹差合の傳

○竹を生る時ハ會釈の花に節あるものを挿べからずそれ竹ハ
節をとりて賞するものなり故に添流に節ある花を禁ず
然れあり又庭に竹植ある時床に竹を生るとて苦しからず抑
竹ハ松と徳をひとしくし千代を壽くものなきバ八千代幾千代を
重ぬるを賞するく

○所の名物草木の傳

○他國に到りて滞留の間花を生る時ハ其國の名物の草
木を閑亭主に好みて其國の名物を真に挿時の正花を添ふ

用ゆること習也則ち國の名物を誉る心也又亭主ハ習ひあり他国の
客入ある時名物の正花あれニ於てハ勝手ニて取よせおきて客
望む時取よせて座しきニ出すべし客訳を知ざれバ好むべし然るを
所の名物ありとて正花ニもちゆれバ又花もあれ類を出して失礼
となるも名物ニもちゆるとも花ハ見合せて盆ニ組合せ出すべし又所の
名物ニても花もなく面白からざる類ハ他國の客の聞およびなく
望むまでも出すべからず是亭主所を卑下のあてろく又所の名物
の草木正花あれバ賞翫甚だし然共客好まずとも花盆ニのせて
出すべし但し亭主挿るとも心ニ用ひてすべし客への饗應なり
又所ニて名物の草木たりとも正花ニもちゆるべからず兎角亭主たる

枯木ニ鐵線　玉簪

鐵線ハ三本以上
五本以下挿べし

生べからず是口傳あり心に用ゆる時ハ正花にかゝざるを以て主とし客へ對して不礼なり又添に用ゆるときハ名物の詮なし是に依て手を下げべからず譬ば難波の住人梅花ハ我土地の名物なればたとへ梅花他國に於ても賞する所の名花なれバ客にも出し亭主も心に用ゆるとも不礼にあらず難波の芦ハ名物なれども正花にかゝざるゆへ客より好まざれバ出さず亭主も又生ざる心得べし

○置花板床の傳

○板床とハ畳を省きて板を敷をいふ此床ハ陽床にして次の間に用ゆ然し陰床に板敷ハあれども陰の床ハ本式ゆへたゝみを省く事あらバ又此板敷の床に置花生る時花器の下に薄板を用バ或ハ板敷に板を重て敷ことを取合わろしとて嫌ふといへる説通例に有し是世俗の誤りなり板に板を重ぬるハ取合わろしといふまでの事に板床に花器を直におくハなくバ神佛へ備物を地に直におくと同前なり床の畳も則ち地なりされバ惣じてたゝみの上へ直に物を置を禁ずバ板敷ハ畳を省きしものゆへ板畳とも世俗に薄板ハ花臺の略なる事を辨ず水氣たゝみへ移らざるためなり薄板を敷て心得ちがひなく板畳ハ此心配に及バず直に置てよしと言つ其上床の置花ハ薄板を本方と心得れども是又ろ筒ちがひなし元来薄板ハ侘人の床に花臺を略して敷なくし其故ハ生花の始ハ

掛花ある床飾ハ真中に掛物右の方隅柱に花器をかけ畳の真中に
中央卓に香爐卓の下板に香箸立おくを本式とす是を略して
香爐ハ其まゝ置香箸を取て其跡へ掛花を取おろして卓下に花を
いけて出来る夫より又卓の足より上をさりて花臺となりて製し
又花臺の足を略して薄板となりし
右の故實を知るものも板畳にハ薄板を用ひずして閉けど故実の
通りに花臺を用ゆることを知ざるなり唯うすき板を用ひざれば
心得て床の置花器ハ薄板より外に乗ざるやうに心得居る
者多し故に板床へハ直に花器を置ものと通用せりされハ故
實を知りて傳を得ざれバ全く教ゆる者の不念よりして板床の
置花にハ花臺に花器を乗べし又板床にハ中央の卓をかざる
べからず中央の卓ハ真の床飾りなり万一卓をかざる時ハ見立
卓を用ゆべし卓下の花ハ勝手次第たるべし

○山吹花の傳

○山吹ハ實のなき花なり夫故婚礼にハ用ひず実ハ子なれバ子孫
なきとて不吉とすれども春ハ山吹のかぎりなき花ゆへ若も
是を用ゆるとされハ山吹を心に用ひ万年青の實のよく数あるを
會釈べし原来ありしハ花ハよからぬしるし実ハ見事なる也
又殊さら葉ハ幾年も育てありより段々若葉出生するゆへ
婚礼の祝儀に用ひてよし山吹の実のなきを万年青ハ實ありて

祝儀をもつて挿るときハ則ち山吹の不吉を轉ずる山ぶきの
添の外にハ万年青を以て春の花に會釈べしこれ此儀ハすべて
実の類ハ十月を以て賞翫し生るものなれバ冬の中ハ添に用
ゆれども春ハ花咲となりて賞する時なれバ実を用ひずこれ畢竟
山吹ハ實の無ものに極る也ゆへに万年青をもつて目出度なれバ
春の山吹に限つて用ゆることをも心得べし

○容用主補の傳

○容用とハ亭主床に花を生るときハ容位に枝をもびらしく
生とゆへ主補とハ客に對し亭主より花を望むときハ客生るふ
主位の方へ枝をもびらかし惣じて花ハ陽にもびくを以て本とすれ

紫陽花

金錢花

蘆　燕子花

芦ハ生方別義なし
ひしらひとして風情をもてれど
又末留枯として風情とすることなり

則ち客ハ明りの陽の方上座なるゆへ此所に座して亭主床に應じて
花を明へむけてなびかし花先を陽に向はし客の光りを陽氣を増しむ
以て利にして賓應なり故にあるじを容用といふ意ハ客を用ゆる也
又客花を生るときハ勝手口の方へ花先枝をなびかし生る是ハ亭主
の光にて花うるはしく咲といふ利を以て挿る是を主補といふ
意ハ客より主を補ふなり然れバ亭主盆に花をとのせ出たり
凡て床相應の花を出す事なれ亭主の習ひ是ハ客我を補ふ
事を我より望む利なれバ容花とより枝を打随分恰好よく勝
手へなびくやうに揃へて生べし万一真の花勝手不向の時ハ真を明
の方へむけて添として勝手の方へ花先をなびかし生る此たれハ真を挫く
しく添を見事なり花を用ゆべし是習ひの口傳なり

○花臺薄板の傳

○卓の長高きを飾り卓下に花を生るハ掛花を略して卓下に
生る所なり又香炉の卓をも略して卓の下板とのべし花臺と
名づけ置花を生る床の前に直く敷又此花臺を略して
薄板ともいへりしかハ掛物長くして花臺を用ゆる時ハ掛物の二文
字を貫ろく見苦しきゆへ花臺を下る心にて薄板を用ゆ又
掛物短き時ハ花臺を用ゆ畢竟床ハかけ物を主としてかざる
ゆへ定例なれバ其恰好よきの宜しきに准ふべし
右此口傳の條々ハ或家の秘書に記す所也然りといへども諸流

あらく大同小異ありて一概に定むべからずつまる所師につきて
学ぶる人ハ其流義の説にしたがふべし一ミに利あれバ偏屈て論じ
べからず

○客に花所望の作法

○花と客に所望のときハ花器に水を入る法あり ○春ハ八分半
○夏ハ九分 ○秋ハ八分 ○冬ハ七分 此のごとく四時に水乃入方あり又
水を入て床の間にすへ置客に花を望むべし客挿終らバ水をさすべし
○花ハ花盆にのせ小道具とそへ床の間の脇に置べし 布巾 花巾とも云
鋏子小刀配木など揃へそゆるなり
○花の置方左右のかはり有流義によるべし

一説ニハ花切小刀布巾
水次図のごとく
そへて出すとも云

柳しだれの長きものハ
輪にして盆に
のせ出すべし

或云右の向ニ水さし
其前ニ花巾左の方ニ花をつむ
花木と草と二種の時ハ水さしの其ニ木次ニ草と積ミ花切茶
巾と花との間ニ置べし

水次

布巾 茶巾トモ云
鋏子
小刀
配木

目上の客人には足つきの具にのせて出すべし

花巾寸法　晒布一幅四方を三ツ折にて一分を去其残二分を用ゆ

下輩へハ塗盆にて

○一ぶん除く

此二ぶんを用ゆ

○右ハ遠州流の寸法なり

三割二分の布の図

一説ニ右四ツ折にして置となり

或云竪ニ三ツニとり横へ中より折又二ツニ折

以上立三ツ横四ツニたゝむとなり

花盆寸法　石州流所用

一尺六寸三分

九寸九分

深サ五分

飾付
中ハサミ
左小刀
右水サシ
黒塗額作之
深サ六分

又二尺三寸二尺三寸も用ゆとなり

○花ニ相ある傳
花ニ徳相貧相閑情とふ事あり先徳相の花ハ方なく滞なく勢ひはくく用ニ満開をつかひ體ハ用ニ准じ半開をつかい留ハ莟を入る也花数多く開く形とするる是を徳相とい貧相と以ハ枝ニ和らもなく直ニのびくる花葉枝ニむざと心得て枝葉ニ鋏子をつれ淋しく挿さる是を貧相とい閑相ハ枝ニ飄纏ありて長短あり最まぼらしく風流ニ挿するを閑相とい やさ左ホ右花ハ態もなく勢ひつよくして直ニのびくると尖る花をふひる諸人好まざる流花ありて唯嶮山を眺むるに似たり花ハ和らく挿る其枝ぶりの自然ニ曲りくるをよく挿口の見へぬやうに心得べし若出生ハ

のミ宗と心得て生るゝ時ハ挿花の意を失ふ之譬ゆれバ人の生れながらに
して人倫の教をしらざる時ハ無智無能なり然るを仁義五常の道を
教へ衣服を正しく行義よく出立せし時ハ如何なる君子とも謂つ
べし左なくて出生の侭の気随無能の失儀にてハ貴人高位の前へハ
出ること能はず花も又其ごとく生れのまゝ枝ぶりの悪きをとゞめなく
葉をすかし清く仕立て挿ざれバ貴人の饗応にハなるまじ左れバ迚
出生を失ひてハ花にあらず唯野に山に生ちし其草木の性質を
よく心得なまを捨ず失はずして清くいさぎよく柔和の枝ぶり
麗しく艶にいけんこそ挿花の本意といふべし
或人曰出生ハ唯野面のまゝを挿てこそ甚物の出生にして天地
自然の理に叶ひ生花の本意なるべしといふ答て曰されバ山野の
ましきとおもはせバ天を刺地を刺掛物をさし客をさし枝つゐハ
鏡となり天蓋となる花其余色々禁忌有物なるべし然れバ
出生の侭にてハ全く客への不礼となり花を挿るハ唯慰の遊興に
あらず客と対して饗応の為なり且ハ吾身の本心の清く正しきを
表はし邪なきを見する為なりされバ工ミに過て出生を失ふハ追
従軽薄の徒に似たり偏に出生と心に重んじ花に行義作法を
おしへ貴人の前にさし出ても心得あらバ自ら風流花葉枝ぶり
これ至極の花形出来なん最練磨の功なくしてハ容易妙所に
至ること難し平生怠慢なくたしなむべきにこそ

生花三才の濫觴

天圓

天圓ニ地方合形圖

南
西
東
地方
北

一大極別而清輕者ハ上テ爲ル天ト是陽也濁重者ハ下テ爲ル地ト是陰也
沖和氣者爲ル人ト謂フ之ヲ天地人三才ト



南

是裏ぐさ之

東西和合

北

東西和合をすれバ則ち三角鱗の
形となれバ自ら表裏のうち
そなはる又和合の角より
裏叉への正中にいたりて切れバ
三角の小形二つとなり表叉ハ
裏叉になり裏叉ハおのづから表と
なる此のごとくになり切れバ
万分にいたるまで表ハ裏と
なり裏ハ表となることあらそて
尽ることなし されバ表うら
陰陽変化きはまりなれ
あることとしるべし

凡形あるものの表尺
裏尺の備はらざる
ものなし
されバ挿花ハ
鱗をとりて規矩とし
縦の鱗ハ置花の方とし横の鱗ハかけ花の方とし和合屈實を以て取扱ふべし
表尺
裏尺
表尺
裏尺
表尺
表尺
表尺
裏尺
表尺
裏尺
又人體ハ表とれバ
図のごとし
陽眼
陰眼
和合の図次ニ出ス
陽ノ手
陰ノ手
陽ノ足
陰ノ足

左右和合之図

図のごとく天ハ陽にして圓なり地ハ陰にして方也東西南北あるを図のごとく二ツに合せバ鱗形となる則ち天地人の三才なり

○凡花の寸法ハ花器の長と二たけと定む是を通例とし流義によりて一たけ半とする有

右花によりてハ三たけ迄ハ挿べし

○右花の尺三分の二と定むることハ人体に表すれバ腰にて折ひざにて折三段となるに同じ右花の寸尺ハなきを定法とすることなれども物によりてハ足ざるも有なきて挿ざるとふてハかなハざれども此寸尺に足ざる花ハ風情の本式にハかなハざるなり盥馬だらひ其余廣口の入ものさ是に准じて器のうちはりをとりて二たけの花の寸尺とさる落し
若又此尺に足ざる草木ハ木ものハ谷間をとり草花ハ株にて分ち水草ハ魚道をあけて二株三株五株七株とうしろより二尺の生気かよひくる所と花の寸尺とし挿方ハ鱗形を縦とし横とし夫々の器に随ふべし将鱗の格よりのびて風流默しがたき枝ハ臨気応変の働にて手練に任すべしされども曲とりて是格をそむきて格を守る

ところちり次の図よくよし

置花の規矩

掛花の規矩



客位陽の入さ

主位陰の入さ





客位陽の入さ

主位陰の入さ



如此法を守る時ハ数百瓶いけるとも其曲をうつて余情をいふれと自在なる花の本数ハ縦横とも添て風情をつくる

(天)二本(人)二本(地)一本すべて五本ニ

又(天)三本(人)二本(地)二本都合七本ニ

又(天)二本あれバ(人)三本(地)二本ニそて七本揃るし(天)三本(人)三本(地)三本都合九本となれ猶変化してハ数百本をも入て全く規矩ニ洩ることなし

尚曲の枝の図を次ニ出に

曲の枝の図

天の枝曲あるをバ外八法の通り人の枝ハ曲あれバ外八法のごとく悉く曲を用ゆる事あるべし



二重切花規矩の図

右図のごとく鱗ごとを規矩とし表が○ハ裏が○となり裏が○ハ表が○となる大小長短種々に変化して形をかはるといへども此法をもとゝしなすべし山野水辺幽谷の気色を観ハ時ハ自ら本性に叶ふべきなり

○花形虚實の事

○花に虚實を備へべき事ハ花矩より出る所にして始て挿んとする所の草木ハ荒乱して形の備はらざるものあればこれを実より出る虚なり然るを今實ある花を○を以て虚なる花の姿を組立るハ虚より實に往なり既に組立て艸木自然の姿を備ふる時ハ原の実に皈りて花矩するハ即ち虚に皈る是すなハち実虚に往ところ一枝一葉の上にも皆虚實ありて此手練老熟せバ虚を挿て実とし実をいれて虚とし虚と実と変化自在にして自然の矩に叶ひぬべし数百瓶なりとも花を挿るも同じ形ちの出来ざるハ虚実の二を以て花矩を扱ふゆゑなりされバ虚実ハ造化に同じくして猶表裏陰陽と共に宇宙の間しばらくも放すべからざるものなしされバ故人も天地の功用をなづけて造化といへり造ハつくり出すなれバ春に花葉を生ずるがごとし化とハ消失又ハ形ちを変るの類ひ是則冬に落花落葉するがごとし造ハ実に往き化ハ虚に往るゆゑ化なるが故に造り出して止ことなし造なるが故に化して止事なし是則虚実ハ表裏陰陽のごとくにして互に相生じて暫時も相離ざる所以也依之此心を守るを第一とすべし

○床の上下容位主位の差別

○床の上下ハ床を三割にして正中と上右の方中左の方とを下とす是ハ床に對ひその左右也故に對いて右の方を明かなると上坐席と

に對して左の方に明口あるを下座床といふ

○床荘并違棚の花形

○床荘の第一とするハ懸物なり但し次第左のごとし
第一墨跡又ハ墨繪を用ゆ次に薄彩色中彩色なり次ハ
極彩色とす。右次第なくバ墨繪ハ表書院中彩色ハ小書院
極彩色ハ次座敷と心得べし屏風とても同断に名筆名画
或ハ高位がたの画などハ格別彩色も墨繪の上に置事もあるべし
次に花ハ立花にても生花にても主の好みにまかせ大概書院ハ大
床なる故に立花なり生花ハ小座敷居間書院などにおくべきなり
次に香卓をかざる事なり凡そ小書院ハ小座敷或ハ次の間居間

違棚下の花

梅三本

留流し

一説ニ東山殿御飾ハ
大書院立花小書院砂物
脇書院生花也ト云

なとに置之居様四方真中なり又卓下に花あらバ掛に入べからず

次に棚荘ハ主の好に任れけるひハ上下花又ハ下ばかり花上ハ荘器又上下ともに荘具も在べし

○唐物和物ともに名器磁器塗物なとハ寸分花配ハ用ゆべからず但花よりハ水際の志まり難きハ是非なく入るべし此時ハ花器の損じぬやうに紙を當て緩く入べし

○花臺薄板ハ花器圓きにハ角なるを用ひ方なる花器にハ丸きを用ゆ薄板も花器も方なるときハ□平と◇角とを向べし

○貴人高位の御前にて花活様の心得ハ先席を立て御前にて少し禮をなし花に對ひて御前を後にせずして羽織を着せず紐をとき

堅固に構へて花の風情なかりしかゝらざる様に取組べし又貴
人の御前にて余り隙取もなし又得手の花なりとも無造作に
早なも好ましからバ程よけれど専とよじ扨花出来上らバ傍なる芥を拂ひ
鋏子小刀も花盆に片付せ始めのごとく礼をなして退くべし但先達て御
所望なるを兼て知し事ならバ荒まし勝手にて拵へ出し御前にて
盆の外へ切ちらしたるハ見苦しかるべし

○遠棚の花形ハ行草の躰にて上下勝手をかへて挿べし花器ハ平
なる物よし別して下の器ハ砂鉢などよし置所ハ上下ともに正中へ置べ
し但し遠棚ハ廣さ方の正中に置あり花形に思慮なるべし

○花出来上りて後花も器にも水打かけ去なり名器竹
紫銅なとハ遠慮すべし又張付床或ハ掛物長れ節も見合すべし

○書院大座敷向の花ハ随分大形に三種も五種も入べしむかう物
花器飾付の品に随ひて賑やかにつくるべし又花留数用ひて花形の
乱ざる様にて遣ふこと専一なり惣じて書院の花ハ會席乃
花とハちがひ書院の荘りなれバ撰びて近よりて評する物にハ
なく只生方時の宜しきを志るべし

○平瓶砂鉢等の風情ハ四季ともに容低く屈曲に態を風情
よし別して草ハ手百手にたつぷりと挿べし砂石ハ細き黒石
よし水深く潔く見ゆる株より二株ハ等分三株ハ寄株にすべし
本と草と二種入るときハ木ハ一本にても宜し草ハ一本ハ禁ず左筋と

分て挿べし又草ながらハ二種にても三種にても同様に見つるとも
よし又木ハ同様に見つるとも是非に筋を分てつかへど但木ながら
生るに三枝備ふりとも一本ハ遣ふべからず何ぞ細き枝か小き
葉など添つゝ二本に挿べし

○

一説に遠棚袋棚といへるものゝ今の世ハ僭して民家にも設く然
家にありえ未遠棚ハ月卿雲客の家に設ありし物にて客ありて正
堂に入来のとき客の冠と上の棚におき烏帽子ハ下の棚におかう
るゝ為に設けられし物とかや袋棚といへるハ又恐れあるも上ある物を
入らるゝ棚にて金枝玉葉の止んごとなき御殿に設らるゝものとぞ
天子常の御調度どもと錦の嚢に入らる 則ち下との紙入をとゝのふ紙袋といふ類なるべし

夫と天子入御のとき御侍児かしらに戴きて御糸りある主設け
せし方其袋と請取奉りて彼袋棚に入おかるゝことあり故に冠烏
帽子の棚より袋棚ハ上におかるゝなり菊桜の御紋のとき南殿の
階上の椽に御児二方ましまして是近く召まつりせらるを彼役乃
御児ありしとぞ然るに足利家京都に御所を建られしより公武混じ
遠棚袋棚とすべての武家まで設けらるゝより終に僭して民
家に設る事にあり行袋棚ハ書画の軸ものと菓子白砂糖の相借
屋とあり遠棚にハ浮世繪草紙謡本などを上ることハあれるぞいと
心苦しとぞ又武野紹鴎が袋棚の製ある八志野宗信に乞て補理ひ
せられしものにて別に設けられしもの[illegible]て所謂志野棚四種乃内

るりとかや是ハ正堂の袋棚とハ同名なれども異物なりと云

○瓶水ハ毒なる事

○本草綱目云花瓶水飲之殺人臘梅尤甚
考槃餘事云梅花秋海棠瓶水有毒
又建蘭瓶水ニ毒なる事五雑俎ニ見えたり人是を服する事ハ
なるまじき事なれども急ニ望ミてハ無ニしもあらざる歟故ニ因に
あらまし記し尚此編ニ洩る口授秘傳ハ拾遺の巻ニ委く出し

生花早満奈飛十編畢

攝港　鷄鳴舎暁鐘成編輯

生花早學　自初篇至十篇　都合十冊　成刻

嘉永四年辛亥六月發兌

書房　大阪心齋橋筋南久寳寺町
伊丹屋善兵衛梓